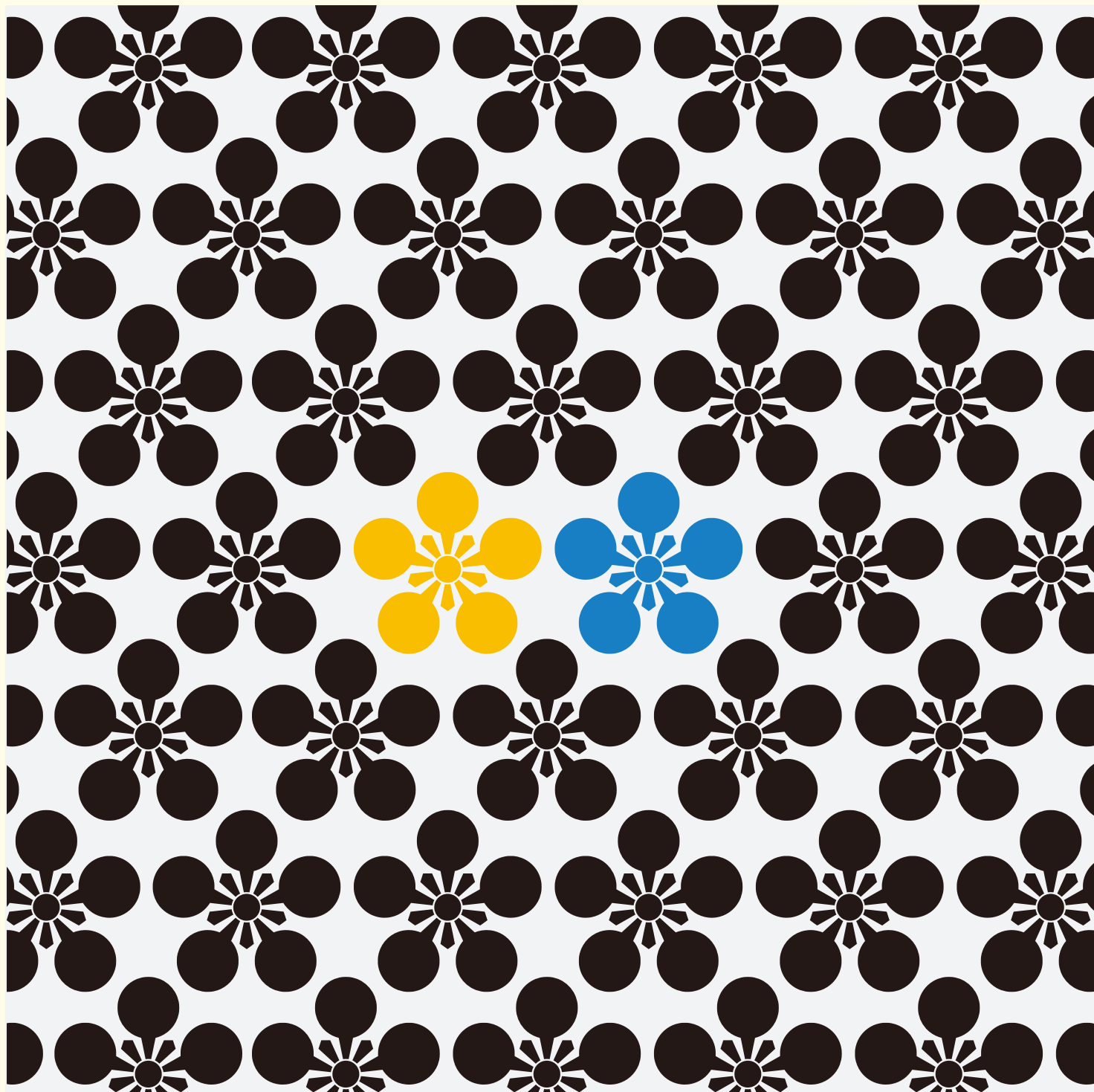


# 学内広報

2015.3.25

no.1466



梅鉢紋 (加賀梅鉢)



国指定文化財  
になったんだ



前田侯爵家から受け継いだ本郷の迎賓場  
懐徳館庭園が国の名勝に



本郷キャンパスの南西端に広がる懐徳館庭園が、2015年3月10日、国指定文化財（名勝）に指定されました。当地に本邸を構えた旧加賀藩主・前田侯爵家の庭園を継承し、いまは東大にとって大切なお客様をもてなす迎賓の場として使われている庭園です。すぐそこにあるのに教職員でもあまり目にする機会がないこの庭園のこれまでと現在の姿について、建築と庭園を専門とする2人の先生の解説とともに紹介します。

※名勝指定に先立ち、十分に管理が行き届いていなかった当時の庭園を現在の状態にまで保全することに尽力されてきた建設エンジニアリングオフィスの河谷史郎特任研究員と故宮島秀夫氏（造園家）に多大なご貢献を頂いたことを特筆いたします。



滝および流れ



流れ～石橋～池



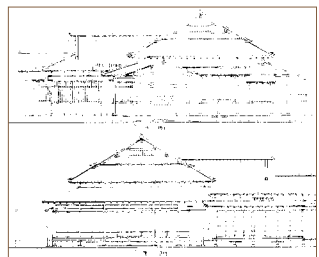
流れ中間部



滝壺付近



↑懐徳館の南側には、芝庭と池泉と築山という3種類の空間で構成された庭園が広がっています。木造の日本館と石造の西洋館があった時代と基本的な構成は変わっていません。



↑戦災で焼失した西洋館に代わり、1951年に旧和館別館の面影を再現するように新築されたのが現在の懐徳館（建坪70.5坪）。南西隅の客間が庭園を眺める主たる視点場です。

（一九〇三年） 明治四三年	（一九〇四年） 明治四四年	（一九〇五年） 明治四五年	（一九〇六年） 明治四六年	（一九〇七年） 明治四七年	（一九〇八年） 明治四八年	（一九〇九年） 明治四九年	（一九一〇年） 明治四十年	（一九一一年） 明治四一年	（一九一二年） 明治四二年	（一九一三年） 明治四三年	（一九一四年） 明治四四年	（一九一五年） 明治四五年	（一九一六年） 明治四六年	（一九一七年） 明治四七年	（一九一八年） 明治四八年	（一九一九年） 明治四九年	（一九二〇年） 明治五十年	
行幸啓記念とし、金2万円を東京帝国大学に寄付（7月8日）	昭憲皇太後の行啓（7月10日）	皇太子殿下 同妃殿下台臨（7月13日）	庭園築山に臨幸記（碑）を建立	露国使節ジョルジュ・ミハイロビッチ大公台臨	英国使節コンノート公台臨	前田邸内敷地と農学部及び代々木演習林を交換	前田家から西洋館、日本館及び付随建物の寄付を申し出	スウェーデン国皇太子妃台臨（9月22日）	前田利為侯、ボルネオで戦死（陸軍大将）	西洋館を「懐徳館」と命名することを評議会に報告	前田家の寄付により、装飾、設備等の修理、同時に庭園の修築を実施（一九三五年に修理完了）	前田家の駒場移転後、建物等を受領。和館別館を現在の懐徳館位置に移築	東京大空襲により、懐徳館及び和館別館が焼失	庭園に外灯設備等取設	和室、厨房、女子便所、給排水設備等の改修及び建物周り、	総長宿舎（大学迎賓館）として再建。併せて庭園をなるべく在来のもので修復	（一九四五年） 昭和二十年	（一九四六年） 昭和二十一年

↓西洋館2階にあった婦人客室。←同2階の広間。暖炉前飾りには美濃産霞石を用いています。出典：『建築雑誌』第263号（1908年）



←築山に建つ臨幸記（碑）。  
「明治四十有三年私七月八日 皇上幸臣利為本郷十日……」と記されています。

→総合研究資料館（現博物館）増築に伴う調査で発掘された西洋館の基礎は、現在の懐徳門脇にあり、アスファルトの防水層や床支持材の溝などが確認できます。写真下は博物館南側に残る昔の懐徳門です。



（次ページにつづく）

# 建築目線で見ると懐徳館庭園

## ルネサンス様式の西洋館と数棟が連なる日本館のセット

ご存じのように、江戸時代、本郷キャンパスの大部分は加賀前田藩の上屋敷でした。明治4年に屋敷地が収公されて文部省用地となりましたが、旧上屋敷の南側の一画、赤門から南側の約1万3千坪は、前田家の敷地として残されました。明治32年、前田家15代当主・利嗣は、当地を本邸と定め、天皇の行幸を仰ぐことを強く願って邸宅の改築を決定しました。利嗣は翌年薨去しますが、第16代当主・利為が遺志を継いで建設に着手。明治35年に起工し、同38年12月に日本館が、同40年12月には西洋館が竣工しました。

日本館は海軍技師・北沢虎造、西洋館は同技師・渡辺謙の設計です。北沢は履歴が不詳ですが、渡辺は明治13年に工科大学を卒業し、内閣臨時建築局技師、清水組技師長、海軍技師などを務めた明治、大正期を代表する建築家で、他の代表的な作品としては帝国ホテル（初代）などがあります。

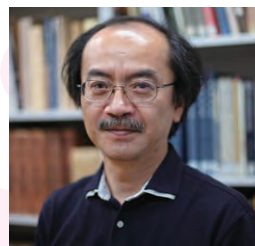
もともと天皇の行幸を目的としたため、充実した建築が計画されたのは言うまでもありません。西洋館は、正面車寄せが西に面し、ルネサンス様式のデザインでまとめられていました。石造、銅板葺き、地下1階、地上2階、総面積延651坪余で、建築費は約19万5千円、装飾費は家具・食器を含んで約11万円。24点の西洋絵画も購入されました。いかに内装に力を注

いだかがわかります。渡辺の設計した洋館のなかで最も上質な建築の一つであり、東京にあった華族・貴族・実業家の邸宅のなかでも第一級と認められます。行幸の際には、1階の南側に向いた主室客間が「便殿」とされ、玉座が置かれました。なお、前田家は行幸を記念して東京帝国大学に国史学講座増設に2万円を寄付し、国史学第三講座が開設されています。

西洋館の東北にあった日本館は、玄関棟以下7棟ほどの和風建築が渡り廊下で連結された大規模な建築群でした。南側の2棟のうち、西洋館に近い1棟が行幸時に使用されたようで、その南庭に能舞台（北沢虎造設計）が臨時に建設されました（行幸後に撤去）。その奥小座敷が前田家の「藏品御覧所」、後室居室が「能楽展覧所」、後室書斎が「便殿」として使用され、庭園の滝は奥小座敷から正面に望めるようになっていました。

## 駒場の本学敷地との交換で本郷の前田邸が東大所有に

この前田家の敷地と邸宅が大学へ移管されるのは、関東大震災後の大正15年8月のこと。本郷前田邸の敷地と駒場・代々木の本学敷地との交換は、関東大震災後の本郷キャンパスの拡充を目的としたものでした（震災復興の際に新築された理学部2号館、医学部1号館は旧前田邸の敷地内）。同時に西洋館、日本館も大学に寄付されることが決まり、実際には駒場の前田家新邸宅の新築・移転を待つ



工学系研究科・教授

## 藤井 恵介

昭和3年8月に交換が完了しました。

大学に移管された旧前田家邸宅は、震災復興などを急務とする大学側の経済的事情からしばらく放置されたようです。しかし文部省から旧前田邸を聖蹟に指定したいとの内示があり、昭和8年に再び前田家から補修費2万円の寄付を受け、昭和10年には完成披露されました。市村讚次郎・宇野哲人両博士によって「懐徳館」と命名されたのはこの時です。以後、懐徳館は本学内外の学資を迎える建物として使用されることになりました。

しかし、この旧前田家邸宅の西洋館と日本館は、昭和20年3月10日の東京大空襲によって炎上し、灰燼に帰しました。西洋館は内部を全焼して取り壊されましたが、西側玄関から南に続く円弧を描く塀（30mほど）とそこに開く庭園への門だけは現存しています（懐徳門）。

現在の懐徳館は、昭和26年9月20日、予算名目上は総長宿舎として、その実は大学の迎賓館として再建されました（設計は柘植芳男）。外観は旧日本館別館の面影を残す佇まい。特に南西隅に位置する客間が庭園を眺める主たる視点場として重要であり、本庭園に欠かせない構成要素となっています。

### 懐徳館庭園こぼれ話

#### 「懐徳」は論語が由来

懐徳館の名は、「論語」の一節「君子懐徳、小人懐土、君子懐刑、小人懐惠」からつけられました。君子（立派な人）は徳を重んじるが、小人（取るに足らぬ人）は土地を重んじる、君子は法を重んじるが、小人は自らの利益を重んじるということ。なお、懐徳館の命名者の一人である東洋学の宇野哲人博士は、浩宮様、礼宮様の名付け親としても知られます。

#### 鶴の噴水があった

当初は、漢詩人・山田新川が遺した灯笼のほか、銅でできた雌雄の鶴の噴水もありました。当時の洋風庭園では流行していたものようです。

#### 2万匹の蜚がお出迎え

1910年の明治天皇の行幸に際しては、京都鴨川から運ばれた河鹿（カエル）数十匹が池に、そして2万匹もの蜚が庭に放たれました。

#### 「JAXAの父」の滝施設

池泉の水の循環ポンプを担当したのは、工科大学教授の斯波忠三郎博士。後に航空研究所所長となり「JAXAの父」と称されました。博士とともに装置づくりに勤しんだ学生の名は島山一清。卒業後に揚水ポンプを実用化し荏原製作所の創設者となった人です。2人はともに石川県金沢市の出身。前田家ゆかりの庭園に関わったのは、いわば必然だったのかも。

#### 前田邸は駒場で見学可

本郷の西洋館はもうありませんが、敷地交換後にできた前田侯爵家駒場本邸の姿は、現在も駒場公園で見学することができます（入館料無料）。

#### 懐徳館と同潤会アパート

現在の懐徳館を設計したのは柘植芳男教授（設計当時は営繕課長）。同潤会アパートの設計に携わった技師の一人として知られます。

# 造園目線で見ると懐徳館庭園



農学生命科学研究科・准教授

## 小野 良平

### 平庭、築山、池泉という三種の空間が構成する庭園

懐徳館庭園は、前田侯爵家が明治43年に造営した庭園を継承しています。地割は、懐徳館の南側に広がる芝生による平庭の空間、東側を占める築山の空間、そして築山の滝（現在は枯れた状態）から流れ落ち西側の池に広がる池泉の空間という三種の空間から構成されています。懐徳館には変遷がありましたが、この基本的な構造は造営以来変化がありません。

まず注目したいのは、築山および池泉という日本庭園に伝統的にみられる構成要素です。日本館からみて左手（東）の奥に築山を設け、その頂から滝を北向きに落とし、滝下で流れを曲げて右手（西）の奥の池につながる池泉の構成が確認できます。これは築山形式の庭園のセオリー通りといってよいデザインです。この庭に対し日本館の奥座敷が滝に正対する位置にあったことが文献から窺え、いわゆる座観式に滝を主景とする眺めを楽しむことが想定されていたようです。ここに本庭園の重要な景観軸があります。

しかし、日本館と西洋館からなる大邸宅からの庭園への眺めはこれに留まらず極めて多様だったでしょう。特に西洋館からは、前面に芝庭が広がり、その向こうに流れと背後の築山が水平的に広がる景観が得られ、これは日本館の奥座敷付近からの池への視軸とほぼ直交するような景観軸として捉えることができます。

加えて日本館、西洋館とも庭園に多方向に面し、また2階に居室を有し、さらに西洋館の東南角は3階相当の塔屋を備えており、これら各所からの立体的で多彩な景観が考慮されていたとみられます。

以上のように、池泉と築山という伝統的要素を用いながら、近代建築からの眺めにも対応した多様な景観構成の工夫が認められ、伝統を踏まえた近代庭園としての傑出した価値をみるすることができます。

次いで注目されるのが、邸宅前面に回遊路とともに広がる芝庭です。西欧造園の影響も受けた明治期の庭園の特徴をよく顕します。芝の広庭は鑑賞だけでなく饗応の場としての役割も重要です。回遊性をもつ饗応の間としての庭園は江戸の大名庭園に代表されますが、その伝統の上に芝庭という新しい形態を融合させた点は、本庭園の傑出した価値の一つです。

### 饗応性・回遊性をもつ庭が大正期の重要な外交の場に

作庭の直接の意図は「皇室の藩屏」として明治天皇の行幸を迎えることでしたが、本庭園の社会的意味はこれにとどまらず、大正期には外交の舞台としても重要な役割を果たしました。大正5年にはロシア帝国の親善使節ジョルジュ・ミハイロビッチ大公が、利為侯本人は外国滞在中にもかかわらず外務省の要請で邸を訪問。大正7年には英国コンノート公、大正15年にはスウェーデン皇太子妃の訪問を受け、庭園で記念写真を残していま

す。華族の中でも武家出身として最高位の爵位を授けられた前田家はまさに皇室の藩屏としての役割を担ったのです。

明治末から大正の首都東京における華族を代表する邸宅として最大級の輝きを放ったのが本郷前田邸であったといえ、このような時代と場所の性格を反映した履歴を空間上に重ねて現代に伝える本庭園の鑑賞上の価値もまた高いものです。

作庭を請け負った伊藤彦右衛門は、江戸城内御庭師として著名だった先代の二代目伊藤嘉市が彦右衛門を襲名したもので、千葉県佐倉市において旧佐倉藩主の堀田正倫別邸の庭園を手掛けた庭師として知られます（明治23年）。土地条件を活かしながら伝統を踏まえつつも時代に応じた新しさを取り入れたバランスのとれた作庭が特徴だったとみられます。

以上をまとめると、懐徳館庭園は、明治期の首都で公的な社交という華族に求められた重要な役割を果たす舞台となる庭園として、伝統的な池泉と築山に近代的な芝庭を融合させ、回遊型の利用、座観式の観賞という双方の体験を実現させた空間です。その特徴が今なお良好に遺されているのは大変価値のあることであり、適切な管理と活用が期待されます。

#### 懐徳館庭園こぼれ話

#### 関東大震災では避難所に

関東大震災の際、邸と庭園は避難所となり延べ19000人に食糧等が提供されました。前田家は資産家としての社会的役割を果たしていたのです。

#### 行啓時には手品も披露

昭憲皇太后の行啓時には奇術師・地天齋貞一が手品を披露。演目は「御儀式万歳帽子」「生花」「洋皿の曲芸」「西洋料理」「糸製造」の五つでした。

#### 名人が奏でた薩摩琵琶

行幸、行啓、台臨のいずれでも薩摩琵琶を奏でた西幸吉は、西南戦争従軍後に上京し、森有礼に認められて音楽取調掛に任命された人でした。

#### 皇太子には活動写真も

皇太子（後の大正天皇）台臨時には、能楽「鞍馬天狗」が演じられ、「印度コロポ風俗」「運動好の婦人」といった活動写真も映写されました。

#### 近隣の飲食店に配慮要請

前田侯爵家は、近隣の飲食店に交渉し、行幸当日には2階を使わないよう要請していました（報酬も支払った模様）。また、東京帝国大学医科大学附属病院に対しては、煙突からの煙害を予防することを要請し、病院側もこれに応じて数日前から7月20日まで無煙炭を使用しました。前田家が行幸に際して細心の注意を払っていたことがわかります。

#### 彦右衛門の庭がロケ地に

二代目伊藤彦右衛門が手がけた堀田正倫邸の庭園は、現在「さくら庭園」として開放されています。2006年に建物が重要文化財に指定されたのに続き、庭園も国指定の名勝に。映画やドラマの撮影に使われることも多く、2010年には「侍戦隊シンケンジャー」（テレビ朝日）や「坂の上の雲」（NHK）、2011年には「JIN-仁-」（TBS）のロケ地になっています。

教養教育の現場から

第8回

## リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、大学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんのレポートでお届けします。

## アクティブラーニングを実現する教室:KALS

／駒場アクティブラーニングスタジオ(KALS)



教養教育高度化機構 アクティブラーニング部門・特任助教

福山 佑樹

## 能動型学習支援施設のさきがけ

「駒場アクティブラーニングスタジオ(KALS)」は情報コミュニケーション技術(ICT)の活用によってアクティブラーニングの効果を最大限に引き出す工夫がなされた教室空間です。KALSは教養学部・情報学環・大学総合教育センターの共同プロジェクトとして運営されており、リベラルアーツ教育の新たな手法を実践する場として位置付けられています。アクティブラーニングには様々な定義がありますが、KALSでは、「データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習」と定義し、そのような学習を行うための支援を行っています。

アクティブラーニングは、いまでこそ各大学で多様な実践がなされていますが、KALSは、まだアクティブラーニングという言葉がそれほど世の中に知られていない2007年に開設された教室で、日本

のアクティブラーニング型教室のさきがけとなっています。KALSには、タブレット端末や電子黒板などといったICT機器、そして、ディスカッション・グループワーク・メディア制作などの能動的学習に対応するために、自由に組み替え可能な机や椅子、ホワイトボードなどが設置されています。駒場キャンパスでは、21 KOMCEEなどにアクティブラーニングに適した教室が増えてきていますが、これらにはKALSを運用して得られた知見が生かされています。

## 学習の支援を行うTAのためのワークショップも開催

それでは、KALSではどのような教育が可能なのでしょう。KALSで行われる授業の具体的な内容を紹介します。KALSで行われる授業では、ICTによる授業・学習支援に加え、授業中に“その場”で行う協調学習を採り入れることによって、学生の能動的な授業への参加が促進されます。また、タブレット端末に

より、学生は情報収集、また、その整理やレポートの作成を行うことができます。そして、可動式の什器により、その場に合わせたディスカッションや発表が可能となります。これまでKALSでは、語学の授業から文系理系問わず様々な授業が行われてきました。

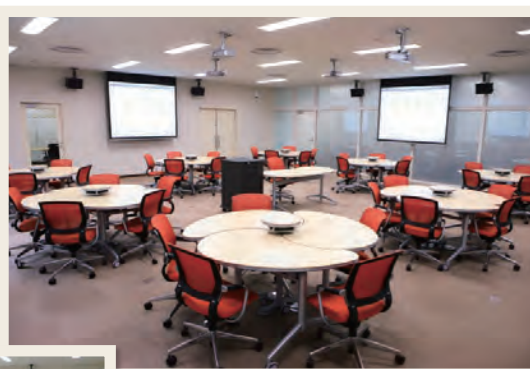
KALSで行われている新しい取り組みとしては、来年度から開設される初年次ゼミナールのティーチング・アシスタント(TA)向けワークショップがあります。知識伝達型の授業とは異なり、アクティブラーニング型の授業ではTAは学習の「支援」を行うことが求められます。この支援をどのように行うべきかを、アクティブラーニング手法を体験しながら考えて貰うためのワークショップを今年度は開催しました。ワークショップでは学習者同士がレポートの添削するピアレビューといわれる手法の体験や、初年次ゼミナールのTAとして重要なことをディスカッションする活動などが行われ、非常に活発な議論が行われました。

## 2014年度冬学期開講授業(全8科目)

全学自由研究ゼミナール 駒場で「食」を考える	渡邊雄一郎、岡田晃枝
全学自由研究ゼミナール Comparative Physiology - Surviving Extreme Temperatures	ヒリー・ジリアン
認知行動科学特論Ⅰ	森一将
全学自由研究ゼミナール メディア創造ワークショップ: デジタルメディア開発論	中原淳
全学自由研究ゼミナール アクティブラーニングで未来の学びを考える	齋藤希史、中澤明子、福山佑樹
中級英語(LS) (A workshop to help students improve their spoken fluency in English)	スティーブ・カーク
方法基礎(データ分析)	大森拓哉
全学自由研究ゼミナール Visualizing Tokyo	リスクティン・ニコラ



↑部門で発行した105分授業向けアイデアが満載の冊子「+15」。



↑KALSの「まがたまテーブル」は、組み合わせにより2~6人のグループワークができるようコクヨファニチャーと共同開発した机で、キャスター付きで移動が自在。教室には、電子黒板、パーソナルレスポンスシステム、瞬間調光ガラスも備えています。←TA向けワークショップの様態。



# ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第23回

渡辺 慎二 渉外・基金課長

最終回

## 東大基金のこれから

「ききんの『き』」も連載開始から23回目を迎え、今回で最終回となります。みなさま「東大基金」のことを少しでも身近に感じていただけるようになりましたでしょうか？

これまで、渉外本部、渉外・基金課の活動や寄附募集の様々な取組みなどをわかりやすく紹介してまいりましたが、最後に総括的な意味も含めて「東大基金のこれから」と題してお話します。

そもそも何故東大基金が必要なのでしょう？

国立大学法人の予算は年を追うごとに逼迫してきており、国の財政状況に影響されない安定的な財源として寄附金は重要になってきています。これだけでも十分寄附を求める理由になります。

しかし、私が基金担当になってから感じたことは、寄附には非常に様々な「思い」が込められているということです。寄附金は自由度が高いと思われている方が多いと思います。そういう面があるのは事実ですが、一方で寄附を頂く際には、寄附者の「思い」を正面から受け止めなければなりません。そうした「思い」を寄附とともに受取り、責任を持って一つ一つ丁寧に応えることは実は簡単なことではありません。寄附と真剣に向き合うことで東大はより一層進化出来る。同時に強力な応援団を得ることができる。そういう効果があるのではないかと考えています。

国民からの負託である運営費交付金、学生から受取る授業料等、国の政策による競争的資金、産学連携による研究費、それぞれ意義のある重要な資金です。その中で寄附金は金額的には決して大きくはありません。しかしその重要性は高く、将来は必ず大学運営の中核となる財源になるものと信じ、そのために我々は日々奮闘しています。

「東大基金が充実することにより東大は進化する」。我々はそう信じて活動しています。そういう部署が学内にあるということをご覚悟しておいてください。東大基金のさらなる充実のため、引き続きご協力をお願いします。



東大基金

検索

今後も東大基金HPで、寄附の成果や奨学生の声などを掲載していきます。是非ご覧ください。

### 東京大学基金事務局

TEL 03-5841-1217 : E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp  
内線21217 : URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

# 留学生さん いらっしやい!

第21回



海を越えて東大にきた学生に聞きました。



インドネシア

アリア・ビフラジハン・ラヤさん

Alia Bihrajihant Raya

農学生命科学研究科  
農業・資源経済学専攻 博士3年

子供の頃に観たTVドラマ『おしん』に触発されて母国農民の生活向上に尽力。二児の母親でもある彼女は、まさに「おしん」を地で行く頑張り屋です。

## Q. どうして日本／東大に来たの？



日本のドラマが好き(珠太ファン)で、日本の大学生に憧れました。母校ガジャ・マダ大学で東大と共同研究をした後で担当の東大教授にアプローチ、入学許可を得ることができました。すでに教員をしていたので、教員対象の奨学金を政府からもらって東大にきました。

## Q. 東大で学んだこと、卒業後の計画は？

母国の農業組合と協力して、流通制度を改革して農民が安定した収入を得ることができるシステムを作り上げました。彼らの教育レベルが向上したことが統計的に証明できました。卒業後は母校で教職に戻りますが、東大とは共同研究などで関係を維持したいですね。日本へ戻る機会をじっくり狙うつもりです(笑)。



## Q. 日本／東大で好きなところは？



日本語は難しいです。子供は日本語がペラペラなので練習相手になってくれるんですが、兄妹でゲンカしていても私には意味がよくわかりません(笑)。東大はハラル食があったり、保育園などのサポートも充実しているところがいいですね。インドネシアの留学生会の集まりも憩いのひと時となりました。

## Q. インドネシアのいいところは？



出身地のジョグジャカルタ市は、京都のような古都、



歴史と文化に彩られています。写真はパティックという染織物を着た私と友人たちです。

協力：国際センター本郷オフィス 制作：本部広報課

## ワタシのオシゴト 第109回

RELAY COLUMN

本部学務課  
教育改革推進チーム 小野 潤

提案・付議・修正・提案・付議・修…



GLP（グローバルリーダー育成プログラム）の新しいロゴと共に。

学務課教育改革推進チームの中心業務は、教育企画室とグローバルリーダー育成プログラム推進室の会議運営です。2つの室とも、教員と職員が協働して行うべき業務を実施するための組織として設置されています。私が担当している教育企画室は、東大の教育に関して、全学的な観点から取り組むことが必要な方策の制度設計や実施計画の企画立案と総合調整を行う組織です。新規の案件を企画立案する際には、関連情報の調査のため資料を収集、分析し、提案書を作成します。その際、室員の先生方に意見を求められたり、資料の作成を任せられたりする機会も多く、教職協働を体現する、大学ならではの仕事と言えます。

教育企画室の提案は、全学の会議にて承認を得られるまで何度も付議します。一年以上かけて議論する案件もあり、苦勞した案件ほど、承認を得られたときの喜びは格別です。



愛器。15年来のつきあいです。

得意ワザ：ジャズギターを少々。ブラジル系も弾きます  
自分の性格：小心者です。ひっそりと生きていきたい  
次回執筆者のご指名：森 正之さん  
次回執筆者との関係：公私にわたりご助言くださる先輩  
次回執筆者の紹介：優しいだけじゃない！

## Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第112回

## 「テクノロジー・リエゾン・フェロー」(TLF) 研修 (自治体職員派遣研修)

TLF研修は、地域振興にむけた産学官公民連携のキーパーソン育成を目的とした産学連携本部の人材養成事業です。地方自治体からの派遣研修生は、当本部で産学連携創出や起業支援の実務、及び地域課題をテーマとした調査・研究に従事します。14年間で計80名(34自治体)の方がこの研修を修了されました。ここでは、平成26年度の3人の研修生に1年間の研修成果や感想などを紹介して頂きます。

永見英光さん(東京都中野区派遣)「中野区では再開発により3つの大学が新たに開設され、産学連携の機運が高まっています。TLF研修を通じ、大学と企業の文化や目的の違いを感じながら、産学連携の無限の可能性も同時に感じています。自治体はその可能性を広げる鍵となれるよう、研修で学んだ財産を大切に抱えて現場で悪戦苦闘していくことが今から楽しみです」。

田中健也さん(東京都大田区派遣)「大田区は、羽田空港という国際交流拠点を持っており、2020年東京オリンピックの開催を控えるなか、国際都市・多文化共生の取組みを推進しています。今年度TLF研修のご縁から、工学系研究科の留学生の方々は大田区立の小学校へ来校して頂き、多文化理解を深める授業を開催して頂きました。今後もTLF研修で経験した学びを活かし、産官学連携の推進に寄与していきます」。

奥貫賢太郎さん(神奈川県川崎市派遣)「自治体職員としての“脱皮”の場でした。研究者や企業との面談、ベンチャー教育の場に携わり、各々の思想や試行錯誤を肌で学びました。社会にインパクトを与える方々の課題意識の高さや不断に学びと実践を繰り返す姿が影響し、“行政にできること”の限界の枠が外れる感覚を覚えています。この貴重な経験はすべて、川崎市での挑戦の糧としたいです」。



平成26年度(第15期)TLF研修生(左から奥貫さん、永見さん、田中さん)。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>



## インタープリターズ・第92回 バイブル

情報学環・生産技術研究所 教授  
教養学部附属教養教育高度化機構  
科学技術インタープリター養成部門

大島 まり

### Engineerは技術者? 工学者?

少し前になるが、昨年9月に学会でイギリスを訪れた。当然ながら、外国なので入国手続きがあり、係官から質問を受ける。

係官：What is the purpose of your visit ?

私：I am here to attend a conference on micro and nano flows.

係官：Oh, so you are an engineer ! Interesting.

様々な国で入国手続きをしてきたが、たいていはScientist、ResearcherあるいはProfessorやTeacherと言われることが多く、Engineerは初めてであった。つまらなそうに事務的に質問をする20代とおぼしき若い係官の口から、Engineerという言葉が自然にさらっと出てきたのは驚いた(失礼)。イギリスでは、Engineerは職業名として定着しているようだ。

では、日本でのEngineerはいかに。技術者と訳されることが多いが、微妙に違う感じ。一方、Engineeringは工学と訳されるので、工学者とも訳される。しかし、あまり聞かないし、ピンとこない。もともとEngineerは、Engineに-erがついた言葉である。Engineの語源はラテン語のIngeniumであり、「生まれながらの才能」や「賢さ」を意味する。しかし、しだいに意味が変化し、蒸気機関のように、蒸気の圧力を機械的エネルギーに変換する動力機関を意味するようになった。しかし、日本でEngineを動力機関と言う人はあまりなく、エンジンで通じる。

また、最近では、Googleの検索エンジンのように、必ずしも動力機関を指すものでもなくなっている。蒸気機関が主要な動力源であった産業革命の時代から、現代社会はコンピュータやインターネットと産業構造や社会が変化している。このように時代とともに、エンジンの適用範囲も変わり、広がっているようである。ただ、蒸気やキーワードなどの入力をエネルギーや情報などへと変換する機関であることには変わらない。いつの時代も、エンジンは科学技術の要素を世の中で利用できるように変換する、すなわち、科学技術と社会を結びつけ、活性化する役割を担った機関なのである。カタカナの呼び方は極力避けたいが、エンジンの原点に立ち戻り、Engineerをエンジニアと言うのが、一番しっくりするのではないかと思う。

科学技術インタープリター養成プログラム  
<http://science-interpret.c.u-tokyo.ac.jp/>

## 救援・ 復興支援室 より

第46回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

### 救援・復興支援室の活動(3月)

3月 福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア  
福島県大熊町の避難生徒への学習支援ボランティア

#### ザンキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤 克憲

今年も3月11日を迎えました。改めて犠牲になられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。昨年のこの時期の本コラムには大槌町の写真を掲載しましたが、今年は隣接する釜石市において被害が大きかった地域の一つである鶴住居地区と、陸前高田市の写真を掲載します。いずれもまだ嵩上げのための盛り土を行っている段階で、4年経ってもまだ本格復興には至らない状況であることがお分かりいただけるかと思えます。

そのような状況の中、本学は大気海洋研究所の施設がある大槌町をはじめ、「釜石カレッジ」で連携している釜石市、学習支援ボランティアを行っている陸前高田市等、岩手県内の被災地への支援活動を地道に続けてきています。地元の大学以外で、常設拠点(遠野分室等)を置いて現在まで支援活動を継続している大学は極めて少なく、本学が関わることによる影響の大きさもあつてか、支援活動を行っている自治体等へ行くとお世辞抜きに心から感謝されていると感じることが多々あります。復興支援活動は単発ではなく、継続することに意味があるとよく言われますが、本学はただ継続するだけでなく、各々の支援活動を高いレベルで行いつつ、こちらも重要な要素である被災地の人材育成を行っていることも、心から感謝される理由のような気がします。

私も本学の構成員であることを誇らしく思うとともに、自分自身の業務である復興支援活動のサポート業務についても、時間の経過と共に変わるニーズを的確に把握しつつ、支援活動の円滑な遂行に尽力したいと気持ちを新たにしました次第です。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス!」。



(左)釜石市鶴住居地区の現況(盛り土にシートを被せている)。  
(右)陸前高田市の現況(奥に土砂搬出用ベルトコンベア)。

[http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html)

Email : kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

内線：21750 (本部企画課)

## トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
2月18日	本部国際企画課	ソウル国立大学学長一行の来訪	2月17日
2月19日	工学系研究科・工学部	物理工学専攻 古澤明先生が平成 26 年度東レ科学技術賞を受賞しました	2月19日
3月3日	教育学研究科・教育学部	濱田総長の特別授業が附属中等教育学校で行われる	1月9日
3月5日	産学連携本部	平成 26 年度東京大学地域振興研究会	11月10日(2014年)
3月9日	本部学生支援課	平成 26 年度 体験活動プログラム活動報告会開催	2月27日
3月10日	本部施設部・附属図書館	アカデミックコモンズ(仮称)新営工事中における旧図書館に関する発見について	3月10日
3月11日	国際本部	オーストラリア国立大学との戦略的パートナーシップ調印式を開催しました	3月4日
3月11日	国際本部	ケンブリッジ大学との戦略的パートナーシップ調印式を開催しました	3月4日
3月11日	教育学研究科・教育学部	「第 22 回教育学部音楽祭」開催	2月13日
3月12日	本部国際企画課	IARU 学長会議を開催	3月2日
3月12日	低温センター	第 6 回低温センター研究交流会開催報告	3月4日
3月12日	広報室	広報誌「淡青」30 号を発行しました	3月4日

## お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
3月1日	本部人事給与課	人事異動(教員)	<a href="http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動(教員)">http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動(教員)</a>
3月12日	本部評価・分析課	新領域創成科学研究科「メディカル情報生命専攻」の設置について	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1305_00001.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1305_00001.html</a>
3月12日	本部評価・分析課	経済学研究科「経済専攻」・「マネジメント専攻」の設置について	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1305_00002.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1305_00002.html</a>
3月27日	広報室	退職教員の紹介	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0508_00003.html">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0508_00003.html</a>

## CLOSE UP

## 平成26年度 体験活動プログラム活動報告会を開催 (本部学生支援課)



当日司会を務めた黒田琴絵さん(左)と王青波さん。



参加学生による発表の様子。

2月27日(金)、本郷キャンパス工学部2号館にて、体験活動プログラム活動報告会を開催しました。報告会には、プログラムに参加した学生、学生を受け入れた学外関係者及び本学教職員等約180名が出席しました。

理学部の王青波さんと教養学部前期課程の黒田琴絵さんの進行で開会し、まず大和裕幸副学長より、学生に成長の機会を与えてくださった受入関係者への感謝の言葉が述べられ、プログラム参加学生の変化、成長、困難への対応を客観的に評価する取組について説明されました。

参加学生の活動報告の前に、教育学研究科の石井悠さんと小島淳広さんが体験活動プログラムの概要を説明し、都内の院内学級でのボランティアと青森県深浦町での地域振興・農業体験に同行し、観察やインタビューから考察した体験活動プログラムの影響を報告しました。

続いて、体験活動プログラムの活動報告として5つのプログラム(カンボジア「医学と平和」、岩手県「復興留学～復興まちづくりの業務体験～」、ア

メリカ「Work experience in the international venture business in Boston」、千葉県「在宅医療・介護体験活動プログラム」、ネパール「ネパールスタディーツアー2014」)に参加した学生が、体験活動から学んだことや将来に活かしたい経験等について報告しました。学外機関からは、釜石市復興推進本部事務局兼総合政策課の石井重成様と、Global Project DesignのBryan Moser様が、学生を受け入れた感想などをお話くださいました。

最後に濱田純一総長より、受入関係者へ改めて感謝の気持ちが伝えられ、学生へ自分のもつ可能性を繰り返し引き出し、素晴らしい人生を送ってほしいという激励の言葉が贈られました。

報告会後の懇談会では、学内外の関係者が活動を振り返り、意見交換をする有意義な交流会となりました。なお、今年度の報告会及び懇談会を実施するにあたり、約15名の学生が企画・立案、当日の司会、受付及び会場案内などの役割を担い主体的に運営に参画したことは、本プログラムにおける成果の一つとなりました。



CLOSE UP

工事中の出土品で旧図書館の設計者が判明

(本部施設部・附属図書館)



発見時の様子 (2014年7月2日)。



出土した箱 (左) と金属プレート。



旧図書館を北東側から見た写真。

本郷キャンパスの総合図書館前広場では「アカデミックcommons (仮称)」を整備するため、地下に300万冊を収蔵する自動化書庫と学術交流のための空間であるライブラリープラザ (仮称) をもつ総合図書館・新館の建設工事を行っています。一昨年から準備工事を行い、4月からは本格的に地下工事も始まるこの現場で、興味深い発見がありました。

それは、工事敷地での埋蔵文化財調査で出てきた旧図書館 (創建1892年 (明治25年)、関東大震災で焼失) のレンガ基礎の解体作業中に、そこに埋め込まれていた約10cm×17cmの金属製の箱が見つかったことです。

この旧図書館基礎は、歴史の偶然で、旧図書館自体が関東大震災で焼失後にも撤去されずに生き残り、今回の掘削によって発見されました。そして、その中に埋め込まれた箱が発見できたのは非常に驚きであり幸運なことと思われます。解体作業中に気づかず工具で突いて金属の箱に穴が開いてしまったのですが、通常機械で一気

に行う解体作業を、人が工具を使って行ったからこそこの発見でした。

開けたところ、中には明治23年8月25日の官報に包まれた金属プレートが入っていました。プレートには、表面に明治23年起工「帝国大学図書室」、裏面に工事に関わった建築技術者達の氏名 (工事監理に山口半六、設計に久留正道。両名は文部技師で、久留は本学出身、明治14年卒) が刻印されており、創建当初の資料がなかったために永らく設計者が特定できなかったものが、今回初めて明らかとなりました。

寺社建築の屋根内部に打つ棟札や現代の定礎箱に近いと考えられますが、明治期に同様の事例が発見されていないようなので、日本の建築史の中でも重要な発見となる可能性があります。

新図書館計画については公式サイト (<http://new.lib.u-tokyo.ac.jp/>) 等でお知らせしています。本発見の続報も含め関連の情報を発信していきますので、是非アカデミックcommonsの工事とあわせて楽しみにしてください。



CLOSE UP

IARU\*学長会議を開催

(本部国際企画課)



\*2006年に設立された国際研究型大学連合 (International Alliance of Research Universities)。東京大学、北京大学、イェール大学、カリフォルニア大学バークレー校、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学、スイス連邦工科大学チューリッヒ校、コペンハーゲン大学、オーストラリア国立大学、シンガポール国立大学の10校が参画。

3月2日 (月)～3日 (火)、山上会館において、第10回IARU学長会議が開催され、濱田純一総長、松本洋一郎理事、江川雅子理事、五神真理学系研究科長 (次期総長予定者)、藤原帰一教授 (法学政治学研究科) が出席しました。本会議では、各加盟大学を取り巻く国内外の情勢や各大学内の施策等についての情報交換、IARUのプロジェクトとして実施している既存事業の進捗確認、新規提案の審議等が行われました。「International Administration in Globalizing Universities」がテーマのセッションでは江川理事、エリス俊子教授 (総合文化研究科)、矢

口祐人教授 (同) が、「Universalism and Regionalism in Globalizing Universities」がテーマのセッションでは羽田正副学長がプレゼンテーションを行い、IARU加盟大学が共同で推進している男女共同参画に関するプロジェクトについては白波瀬佐和子総長特任補佐 (人文社会系研究科教授) が報告を行いました。

また、学長会議前日の1日 (日) には、加盟大学の卒業生に向け、第1回目のIARU World Alumni Forumが開催され、学長、卒業生によるパネルディスカッションや基調講演、ネットワーキングセッションなどが行われました。



CLOSE UP 「淡青」30号発行 (広報室)



本部発行の広報誌「淡青」第30号の特集は「濱田総長時代の東京大学 動き始めた知の森」。「森を動かす」「行動シナリオ」「タフな東大生」「知の共創」「秋入学」……と印象的な言葉とともに鬱蒼とした知の森を揺さぶってきた濱田純一総長の6年間の、全6章28,000字の本人インタビューと、総長を間近で支えた諸先生の言葉とで綴ります。本誌を一読してこの6年を振り返ってから新年度を迎えるのが、よき東大人の務めです。

全学サイトのトップを飾る写真を募集中!

3月2日から一新された全学ウェブサイト英語版では、トップページを飾るキャンパス写真を随時募集しています。春夏秋冬を感じさせるあなたの写真で東京大学の魅力を海外にいる未来の東大生にアピールしてみませんか! (ギャラなし/大名誉あり) 送信 & 問い合わせ先: kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



平成27年度  
学内広報  
配布スケジュール  
※別冊発行に伴い号数は変わることがあります。

1467号	4月30日	1469号	6月30日	1471号	8月31日	1473号	10月31日	1475号	12月25日	1477号	2月29日
1468号	5月29日	1470号	7月31日	1472号	9月30日	1474号	11月30日	1476号	1月29日	1478号	3月31日



## 国立大学は、National Universities か？

2011年の冬にUAEのオマーンで研究集会があった。朝食で顔を会わせた旧知のドイツ人とロシア人（在米）数学者に、大学の入学者に対する卒業生の数の比率を聞いてみた。「アーヘン大学だと5割以下4割くらいか」、また一方「モスクワ大学も半分以下だ。卒業生のqualityは高い」という返答であった。わが東大の場合は、Webページの学生数データを用いて簡単な仮定の下（留年・降年なし）で計算すると、第2学年でいなくなる人が2%強、3・4年生の間でも同じような数字になることが推定できる。つまりは、95%も卒業できるわけである。資格取得という明確な目標がある、医学部・薬学部・教育学部は、さらに100%近い卒業率になる。これは学内での「努力」の結果ではあるが、「斜め」から皮肉な見方をすれば、在学中に身に着けた「差分」は卒業資格に反映されず、東大の卒業資格は、高校・予備校の教育で決まる、ということになっている。

さて、団塊の時代の国内の新生児数は年間270万人を超えていたが、私の誕生年の1950年では240万人であることが厚生労働省のWebページですぐ分かる。他方、現在の1年生の年では、120万人くらいの新生児が誕生

している。その間、東大の入学定員は3000人から僅かに増えている。人類は40年間では進化しないと思われるので、どうなるか想像できる。国立大学の学生は「極力卒業させる」は文科省の方針と仄聞する。しかし、このような法律があるとは聞いたことがない。その下だと、政令・省令・課長通知となり「行政指導」になるのであろうか？ タダの教授には分らない。

昨年、ヘッドハンティング会社の人に「東大の創立以来の卒業生数をご存じですか？」と口頭試問をされた。「Fermi計算」という手法で「30万人くらいでしょう」とお答えすると、さすが数学の教授ですね、とお褒めにあずかり、正確には27、28万人くらいでしょう、と教わった。このままだと今後30年間に東大はさらに9万人の卒業生を送り出す。できれば日本のためにも「国際標準」の優れた卒業生であって欲しい。

織田孝幸  
(数理科学研究科)